英文学の歴史

英文学の歴史

福原麟太郎著作集

12

研究社
1969

福原麟太郎著作集 12
英文学の歴史
昭和四十四年十月 二十 日 印刷
昭和四十四年十月二十五日 発行
定価 一、三〇〇
著作者 福 原 麟 太
発行者 小 酒 井 益 蔵
印刷者 小 酒 井 益 三 郎
印刷所 研究社印刷株式会社
発行所 研究社出版株式会社
郵便番号一六二
東京都新宿区神楽坂一の二
電話東京(二六九)四五二一(代表)
振替 東 京 八 三 七 六 一
(乱丁・落丁本はお取替え致します)

© R. Fukuhara

目次

英文学の話　一

英文学の技術

序　論……一九

第一章　形而上詩歌……四〇

第一節　形而上詩人……四〇

第二節　アンドルウ・マーヴェル……四九

第二章　諷刺文学（一）……六〇

第一節　概　観……六〇

第二節　ヂョン・ゲイ『乞食のオペラ』……六九

第三節　ポウプ『愚者経』……七七

第三章　諷刺文学（二）……八九
スウィフト『ガリヴァー旅行記』……八九
第四章　伝記文学……一〇七
第一節　伝記の条件……一〇七
第二節　英国における伝記の歴史……一一二
第三節　ヂョンソンとボズウェル（その一）……一二〇
第四節　ヂョンソンとボズウェル（その二）……一二五
第五章　随筆（一）……一三四
第一節　ベーコン『随筆集』……一三四
第二節　その他の随筆家達……一三八
第三節　ヒウマーについて……一四五
第六章　随筆（二）……一五二
第一節　チャールズ・ラム……一五二
第二節　『エリア随筆』……一五六

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

結論—聖書とシェイクスピア……一六五

英文学の流れ

はしがき……一七三

中世英文学……一七五

一　アングロ・サクソンの文学……一七五

二　中世英語の文学……一九〇

序（一九〇）

a　アーサー王物語そのほか（一九四）

b　チョーサーをめぐる人々（二〇〇）

c　庶民の文学（二二）

文芸復興期……二三九

一　人文主義……二三九

a　ヒウマニスト達（二三九）

b　新文学（二三五）

二　宗教改革……二四二
三　エリザベス朝……二四七
序（二四七）
a　戯曲（二五〇）
b　シェイクスピア（二六〇）
c　詩歌（二七〇）
d　散文（二七七）
十七世紀……二八六
一　エリザベス朝の余勢……二八六
序（二八六）
a　戯曲（二八九）
b　詩歌（二九三）
c　散文（三〇〇）
二　清教徒革命と王政復古……三〇五
序（三〇五）

a ミルトン (三〇九)
b 復古期演劇 (三一七)
c ドライデン (三二〇)
d 名誉革命 (三二三)

十八世紀……三二六
一 庶民階級の文学……三二六
二 ヂャーナリズム……三三五
三 ポウプの時代……三四〇
四 小説……三四九
五 ヂョンソンの時代……三五八
a ヂョンソンとその周囲 (三五八)
b ロマンティシズム (三六七)

浪漫主義時代……三七九
序……三七九
一 湖畔詩人達……三八四

二　小説……三九一
三　若い詩人達……三九五
四　随筆と批評……四〇二
ヴィクトリア朝……四〇八
一　ヴィクトリア朝文学の背景……四〇八
二　詩歌……四一五
三　批評……四二五
四　小説……四三三
五　世紀末……四四八
a　世紀末の詩文（四五〇）
b　新劇運動（四五六）
c　アイルランド文芸復興（四五八）
二十世紀……四六二
一　第一次大戦まで……四六二
a　詩歌（四六二）

b 小説 (四六七)
c 劇 (四七一)
d 小品散文 (四七六)
二 第二次大戦まで……四七九
a 詩歌と批評 (四八一)
b 小説 (四九〇)
c 劇 (四九八)
三 戦後……五〇一
あとがき……五一一
掲載紙誌一覧表……五一三
第六天町時代の著者 対本扉
チョーサー肖像 対一九六
マーヴェル肖像 対一九七
ニウゲイト監獄 対二四〇
ドルアリー・レイン及びコヴェント・ガーデン両劇場 対二四一

英文学の話

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co

英文学の話

一

英文学は七世紀に始まりました。ですから、日本の文学の始まりと時代を同じくしていると言ってよいようです。そのころは日本の方が文明国であったとも考えられます。

その文学を生んだ人達は、北ヨーロッパからイギリスの島へ移動して来た民族で、後にアングロ・サクソンと呼ばれました。

この人達は、大陸にいたころ、口伝えにして覚えていた叙事詩『ベオウルフ』を、この島へ持って来て伝えました。これが英文学の最初の大作でありました。『ベオウルフ』はそういう昔の物語詩ですから、日本の古い物語とも共通の点がありますが、それを伝えている民族の持っている精神や風俗をも、物語っております。武勇ということが、武士には大切であったということなど、わかります。

この国で出来た同じような詩に『モールドンの戦』というのがありますが、同じような精神を持っております。

はじめ英文学の中心は、北イギリスにありましたが、九世紀になりますと、南の方にその中心が移動します。いまのウィンチェスターの都に、やがてアルフレッド大王が現われます。大王は文化をひらくために非常な努力をし、翻訳をしたり、記録をはじめたりします。大王の命で書かれた記録に、『アングロ・サクソン年代記』というものがあります。

キリスト教が、この時代もう盛んにひろがっておりました。アルフレッド大王の訳書のうちにも宗旨の本がありますが、南イギリスのキャンタベリーにはキリスト教の本山が建ちました。そしてキリスト教文学ともいうべきものも書かれました。宗旨の文学は物語の文学とならんで、これから、長い間きそって発達してまいります。

しかし、このアルフレッド大王などの英国は十一世紀までしか続きませんでした。それは一〇六六年に、ノーマン人にこの国が亡ぼされたからでした。

二

一〇六六年にノーマン王ウィリアム一世が、この島へ攻め込んで来て占領してしまいました。そ

こでノーマン人とイギリス人との混血が行なわれるのですが、文化も融合しました。このことは大切なことのようです。ノーマン人というのは、もともとは北方民族でしたから、異人種の混血ということではなかったのですが、永い間フランスにおりましたから、文化は、南ヨーロッパ文化、すなわち地中海文化でした。イギリスの文化というのは、このようにして、南北ヨーロッパ文化の融合の上に成り立つもので、イギリス文学の特長もまたそこにあるようです。

十一、十二、十三世紀というのは大体、ノーマン人の統治下にありましたから、その文学もフランス文学であったのですが、十四世紀からイギリス文学が盛んに作られるようになりました。私は一三七〇年をその変り目の年であると考えます。

フランス文学が主な文学であったころにも、しかし、イギリス文学というべきものが次第に発生しておりました。そのうちで、アーサー王物語と呼ばれるものは非常に重大です。アーサー王を中心にした武勇の話で、しかもキリスト教の信仰の物語でもあります。これはやがて、十五世紀になって大成しますが、ヨーロッパ中世文学のうちの雄篇であります。

そのほか叙情詩も生れます。「夏は来にけり」という歌が有名です。劇のはじめもこのころ見られます。

一三七〇年から一四〇〇年に亘って、すぐれた文学が現われます。そのうちでチョーサーの物語

詩が最も有名でそれは『キャンタベリー物語』といわれます。これは中世ヨーロッパにあった諸国物語集といってもよいものですが、チョーサーは、人間の生活や性格を描写することに興味を持っていたようです。英文学の性格描写好みということが、もう起っているかと思われます。その他ラングランドとか、ウィクリフとか。

三

十五世紀になりますと、庶民の文学ともいうべきものが起って来ます。これは面白いことです。踏謡とか劇とかですが、踏謡では、歌と踊りと音楽とがいっしょになっていて、村の中で口伝えに発達したもので、原始の文学の形を伝えているといってよろしいでしょう。劇は、宗教劇ですが、前から徐々に発達しておりました。宗教劇に加えて、この頃は道徳劇というものも出来ました。庶民のためのものであったのが特色です。

印刷術が、キャクストンという人によって伝えられたのは、この世紀の末でした。ロンドンに活版印刷所を設けました。これから本がどんどん出ました。そして安くなりましたので、たくさんの人が読むようになりました。この印刷所で出した本にはチョーサーの詩があります。またアーサー王物語もありました。

アーサー王物語は『アーサー王一代記』と言い、マロリーという人が書いたことになっておりますが、マロリーが誰であったかは、よく解りません。しかし、イギリス文学の中でこの話が大成したということは、その功績の一つです。

この世紀に、ヨーロッパ本土は既に文芸復興期に入っているのですが、イギリスではまだ、そこまでに至りません。しかし、キャクストンの印刷を境にして、もうその時は来ていたのです。このころまでの文学を中世英文学と申します。

中世英文学を二つにわけて、一〇六六年を境にし、その以前をアングロ・サクソン文学期、その以後を中世英語文学期とします。文学の性質もちがいますが、言葉もちがいます。詩の韻律の方法も異なっております。

十六世紀からの英文学は、近代英文学と総称してよろしいでしょう。一五〇九年にヘンリー八世が即位し、エラズマスが、サー・トマス・モアの家へオランダから来て滞在しておりました。これから、英文学の文芸復興期が始まります。

四

十六世紀にイギリスはローマ法王から独立して新教国になりました。またスペインの無敵艦隊を

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com